

## 第3章 本研究において検討する4つの柱

第2章の知的障害教育における学習評価の意義と課題では、知的障害教育の学習評価に関わる課題として、目標に準拠した評価、個人内評価の重視、指導目標や指導内容、評価規準の妥当性の向上、個別の指導目標や指導内容の妥当性の向上等が挙げられた。中教審報告で、学習評価を踏まえた教育活動の改善の方策として、学習評価のPDCAサイクルの確立と、その中で学習評価を実施することが重要であると示しているように、これらの課題を達成するためには、学習指導に係るPDCAサイクルと関連付けて検討していかなければならないと考える。本研究では、まず知的障害教育における学習指導に係るPDCAサイクルに関する要素を整理した。次に、これらの要素を基に、知的障害教育の学習評価に関わる課題や、先行研究で明らかになった知的障害教育における学習評価の現状と課題を検討したところ、知的障害教育の学習評価に関わる課題を解決するために検討しなければならない柱を4つに整理することができた。そこで、知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究を進める上で、知的障害教育の学習評価に関わる課題を4つの柱で整理し検討することとした。さらに、知的障害教育における学習指導に係るPDCAサイクルの中に4つの柱の位置付けを表し、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」(図3-2-1)を作成した。本章では、知的障害教育における学習評価のPDCAサイクルの作成、本研究において検討する4つの柱、知的障害教育における学習評価のPDCAサイクルと4つの柱との関連について述べる。

### 1 知的障害教育における学習評価のPDCAサイクル

#### (1) 知的障害教育における学習評価のPDCAサイクルの作成

中教審報告では、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である」とし、「Plan：指導計画等の作成」、「Do：指導計画を踏まえた教育の実践」、「Check：児童生徒の学習状況の評価」、「Action：授業や指導計画等の改善」といった、学習指導に係るPDCAサイクルを示している(図3-1-1参照)。

こうしたPDCAサイクルの実施は知的障害教育でも重要であることから、本研究では、中教審報告で示された学習指導に係るPDCAサイクルを基に、知的障害教育における学習指導に係るPDCAサイクルを作成し、知的障害教育において重要と思われる要素をPDCAの中に示した。以下、本研究で作成した、知的障害教育における学習指導に係るPDCAサイクルとその中で示した要素について記す。

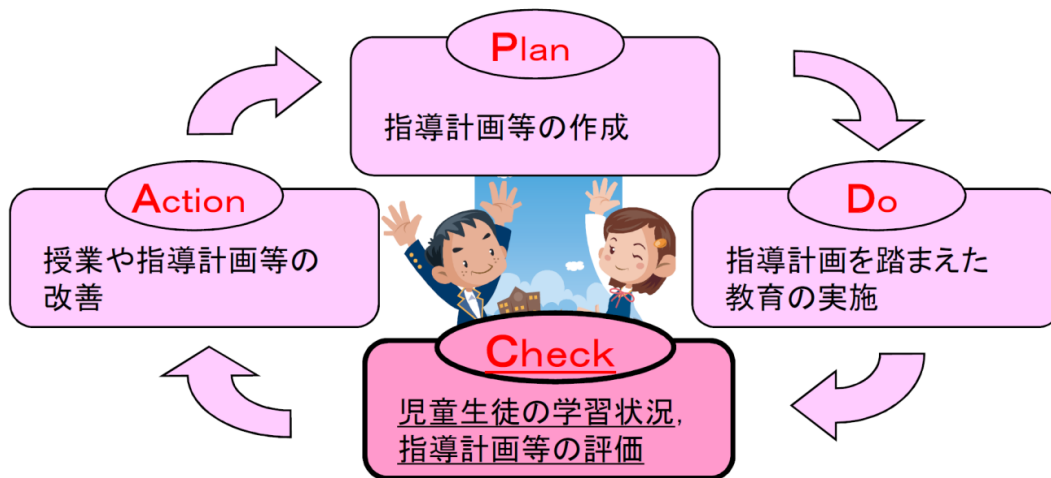


図 3-1-1 学習指導と学習評価のPDCAサイクル（文部科学省, 2013）

## （２）教育計画作成段階（P）

「P」の部分では、教育基本法から学校教育法、そして学習指導要領を踏まえることをまず記し、教育基本法及び学校教育法に示されている教育の目的や目標の達成を目指すために、学校の具体的な教育目標が示されていることを記した。各学校では、ここに掲げる目標を達成するような教育を行うため、障害の状態及び発達の段階や特性、地域や学校の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成しているので、教育課程を基に、年間指導計画、単元計画の作成、単元の目標を設定するという流れを示した（図 3-2-1 参照）。ここでは、「個別の指導計画」についても、年間指導計画や単元の計画、目標の設定等と並行して設定されると捉えている。

教育計画作成段階で重要となるのが、観点別学習状況の評価の 4 観点の設定と、観点別学習状況の評価の 4 観点に基づく評価規準の設定である。

観点別学習状況の評価を効果的に実施するためには、観点別学習状況の評価の 4 観点を基にして、単元の目標や内容、児童生徒につけたい力、育てようとする資質や能力及び態度を踏まえた評価規準を設定する必要がある。特に、設定した目標について、児童生徒がどのような学習状況として実現すればよいかを具体的に想定した評価規準を作成することが重要である。

評価の観点を基にして設定した単元の評価規準と、個別の指導計画において設定した児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した指導目標や指導内容・方法を基に、児童生徒が取り組む授業の個人目標を設定し、単元の授業計画（教師による支援、教材・教具の工夫など）を作成する。その際、学習活動の構想を練るとともに、単元の評価計画（評価方法、自己評価、相互評価、ポートフォリオの活用など）も授業計画の中に位置付けることが必要である。評価規準を作成しても、実際の授業実践において評価規準で示した内容の活動がなければ、観点に基づく学習状況の評価をすることができない。評価の観

点を明らかにし、何をどのような方法で評価するのかについて計画段階で整理しておくことが重要で、評価計画を作成することが必要となる。評価計画を作成することで、授業における教師の支援や教材・教具の工夫、学習環境の設定を整えておくことができ、目標に準拠した児童生徒一人一人の学習状況の評価が実現すると考える。

### （３）指導計画・評価計画を踏まえた教育活動の実施（D）

「D」は、児童生徒が実際に授業に取り組むとても重要な部分であり、ここでの実践をいかに充実させるかということがPDCAサイクルの中では大切になってくる。そのためには、まず、「P」の部分で作成した指導計画や評価計画を踏まえた実践と学習状況の評価が重要になると考える。

「D」の段階では、次の２点が重要である。１点目は、授業者同士の共通理解である。本時の授業については、児童生徒一人一人の目標や評価の観点についてあらかじめ確認しておく必要がある。この点を共通理解しておかなければ、学習状況の適切な評価ができなくなる。２点目は、指導計画・評価計画に沿った教師の支援や教材・教具の工夫、学習環境の設定である。評価規準で示した内容について、学習状況の評価できるように準備を進めて授業を実施することが必要である。単元の目標の達成状況が把握できる評価方法を工夫し、児童生徒の学習の状況を的確に評価できるようにするという事は、例えば、思考・判断・表現に関する評価規準が設定されているならば、児童生徒が思考・判断・表現する場面の設定をして授業を実施するという事である。実際の授業では計画通りに進まないことも考えられるが、授業づくりの視点を基に整理した支援の方法や工夫を実践し、児童生徒の主体的な取組を促すなど、自ら活躍できる場面を設定してうまくいったことや進歩したことを積極的に評価していくことが大切であると考えられる。

### （４）学習状況の評価、授業の評価、指導の評価（C）

「C」部分では、「評価」を縦の軸と横の軸で考え、児童生徒の学習状況の評価を「学習状況の評価」、授業や単元の指導に関わる評価と児童生徒の学習状況の評価を合わせたものを「授業の評価」、授業構成や教師の支援、単元計画や年間指導計画等の指導に関わる評価を「指導の評価」として整理した。

「学習状況の評価」は、児童生徒の学習状況を分析的に捉える観点別学習状況の評価を実施するなど、児童生徒の学習状況を捉える評価のことである。ここでは、目標に準拠した学習評価の実施が重要となる。また、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する個人内評価も含まれる。こうした授業における児童生徒個々の学習評価を集積し、それにより、単元・学期・年間での総括を行う。

「授業の評価」は、児童生徒の学習状況の評価から、授業や教師の指導に関わる評価を行うことである。授業構成はどうであったか、教師による支援は適切であったか、といったことに加え、授業の目標の妥当性はどうかについても評価する。そして、

これらの授業の評価をまとめることで、単元の総括を行う。「授業の評価」では、授業づくりの視点と関連させることで、より確かな授業改善につなげていくことができると考える。このことは、指導と評価の一体化を進める上で重要である。

「指導の評価」は、授業構成や教師による支援、授業目標の妥当性等の授業の評価を集積して、これらを基に単元計画や年間指導計画、個別の指導計画等の評価を実施することであるとした（図 3-2-1 参照）。

この「C」の部分では、観点別学習状況の評価の4観点に加え、「授業づくりの視点」など、授業に関することや指導方法に関すること等を評価する視点も重要になってくると考える。ここでは、「学習状況の評価」、「授業の評価」、「指導の評価」それぞれの評価を実施していく中で、授業づくりの視点の設定と活用の工夫や、学習状況の評価と授業の評価、指導の評価を関連付ける工夫、学習評価と授業づくりの視点を関連付けた評価の工夫等を行うことが重要になってくる。このような工夫により、学習評価を授業や単元のみでの評価で終わらせることなく、学習評価を指導の改善に活かしていくことができ、指導と評価の一体化につなげていくことができると考える。

#### （5）授業改善、指導計画の改善、教育課程の改善（A）

「A」は、学習評価を基にした改善や、個に応じた指導の充実を図っていく部分である。ここでは、「C」の段階で実施した評価を改善に活かしていくための工夫が必要になる。各授業や単元等の指導に当たっては、児童生徒の主体的な活動とともに、目標の実現を目指す指導の在り方が求められている。そのため、児童生徒の学習状況を目標に照らして評価し、その結果を踏まえて児童生徒一人一人の目標を実現できるように指導計画や授業の工夫改善につなげていくなど、いわゆる「指導と評価の一体化」を図ることが大切になってくる。

評価を指導の改善に活かしていくための工夫としては、「体系的な学習評価のP D C Aサイクル概念図」（図 3-2-1 参照）で中央に示した「授業づくりの視点」を活用することなどが挙げられる。また、学習評価を、教育活動の見直しや改善に結び付ける工夫として、評価を共有する場の設定や情報を記録する書式などのツールの活用が考えられる。より効果的な学習評価の推進を促していくためには、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすとともに、学校における教育活動全体の改善に結び付けることが重要である。一つ一つの授業における学習評価と授業改善の視点や、単元における学習評価と単元計画の改善の視点など、学習評価を学習指導の評価に生かすための視点を明らかにし、学習評価を授業や単元のみでの評価で終わらせることなく、児童生徒の学習状況を適切に評価し、評価を指導の改善に活かしていくための工夫がここでは必要であると考えられる。

## 2 本研究において検討する4つの柱

### (1) 本研究において検討する4つの柱の位置付け

前述した、中央教育審議会が指摘された学習評価に関わる課題、先行研究（国立特別支援教育総合研究所，2012）における知的障害教育における学習評価の現状と課題からは、知的障害教育における学習評価に関わる課題として、目標に準拠した観点別学習状況の評価の実施、個人内評価の重視、学習指導と学習評価の一体化の推進、単元や授業における目標や指導内容の妥当性の向上、学習指導に係るP D C Aサイクルの確立などが挙げられている。そこで、知的障害教育における学習指導に係るP D C Aサイクルを基に、中教審報告で指摘された知的障害教育の学習評価に関わる課題や、先行研究で明らかになった知的障害教育における学習評価の現状と課題を検討し、知的障害教育の学習評価に関わる課題を解決するために検討しなければならない柱を、①観点別学習評価の在り方、②学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫、③学習評価を児童生徒への支援に活用する方策、④組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策の4つに整理した。学習評価は、学習指導に係るP D C Aサイクルの中の様々な段階で繰り返されながら展開しているので、4つの柱を設けることで、様々な段階のP D C Aサイクルが、どのような要素の中で、どのような視点で繰り返されているのか検討することができると考えた。

中教審報告では、知的障害教育においても、学習指導に係るP D C Aサイクルの中で学習評価を適切に行い、児童生徒の学習状況を評価した結果を踏まえて授業改善に結び付けていくなど、指導と評価の一体化を図りながら、一人一人の目標の着実な実現を図っていくことが重要であることを示している。これらのことを踏まえ、様々な段階のP D C Aサイクルがどのような要素の中で、どのような視点で繰り返されているのかについて、知的障害教育における学習指導に係るP D C Aサイクルと、本研究によって検討したい4つの柱とを関連付けながら重層的に示して一つの図にまとめ、「体系的な学習評価のP D C Aサイクル概念図」を作成した（図 3-2-1）。本概念図と関連させている4つの柱それぞれの検討の視点は、以下のように整理した。

# 体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図

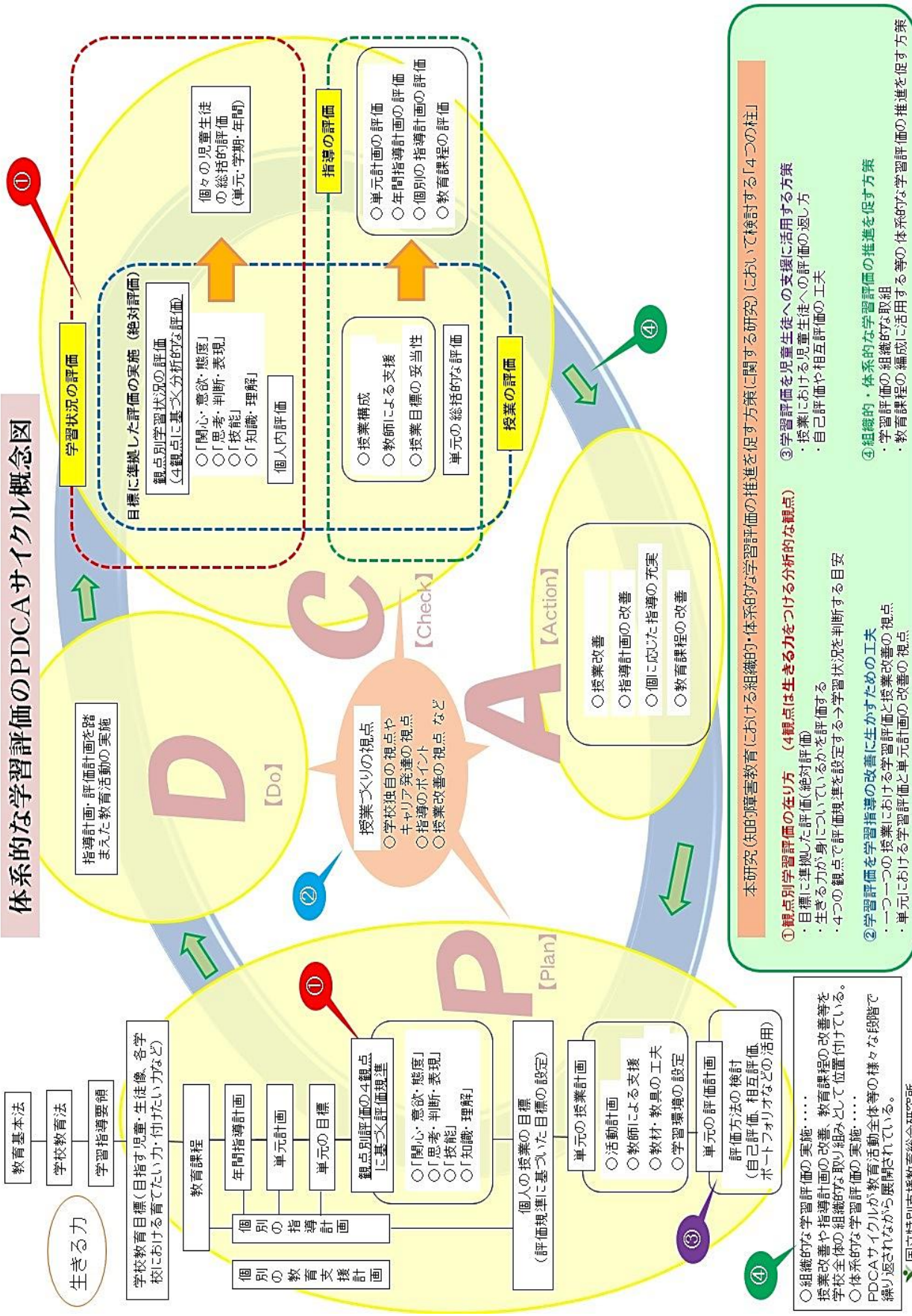


図 3-2-1 体系的な学習評価の PDCA サイクル概念図

## (2) 観点別学習評価の在り方

観点別学習状況の評価とは、各教科や単元等で示す目標の達成状況をいくつかの観点に分けて分析的に評価する方法である。教科や単元等で示す目標の達成状況を、いくつかの観点に分けて分析的に評価することで、学習に取り組む児童生徒の意図や判断の様子から、児童生徒一人一人の意欲や気づき、思考・判断等を捉えることができる。知的障害のある児童生徒も、学習活動の中で様々なことに気づき、そして思考し、判断している。学習の結果のみで評価するのではなく学習の過程における評価も行い、知識理解面や技術面だけでなく、興味・関心、意欲、思考、判断、表現等の側面を捉える学習評価を観点別に実施するとともに、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を行うことで、児童生徒一人一人の「生きる力」をはぐくむ教育活動の充実を図っていくことができると考える。そこで、観点別学習評価の在り方では、観点別学習状況の評価の4観点を基にした、分析的な学習評価の在り方について整理し検討するため、「目標に準拠した評価（絶対評価）」、「生きる力が身に付いているかを評価する視点」、「4観点での評価規準の設定」を検討の視点とした。

観点別学習評価は、観点別学習状況の評価の4観点の設定と、それに基づく評価規準の作成が重要になるので、教育計画作成段階「P」の部分と関わりが深い。また、実際に評価を行う「C」の段階で示した「学習状況の評価」、「授業の評価」、「指導の評価」にも関わることなので、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」(図3-2-1)では、特に「P」と「C」の部分に関連があるとし、図中では赤の吹き出しに①と記して関連する場所を示している。

## (3) 学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫

各授業や単元等の指導に当たっては、児童生徒の主体的な活動とともに、目標の実現を目指す指導の在り方が求められている。そのため、児童生徒の学習状況を目標に照らして評価し、その結果を踏まえて児童生徒一人一人の目標を実現できるように指導計画や授業の工夫改善につなげていくなど、指導と評価の一体化を図ることが大切になってくると考える。そこで、学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫では、指導と評価を一体的に行う意義や重要性について検討するため、「一つ一つの授業における学習評価と授業改善の視点」、「単元における学習評価と単元計画の改善の視点」を検討の視点とした。

学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫は、教育計画作成段階から始まり、その工夫が実践に移され、実践を基に「学習状況の評価」、「授業の評価」、「指導の評価」を実施し、授業改善につながっている。したがって、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」(図3-2-1)では、すべての要素に関連すると考えている。また、それぞれの要素に関連する、学習評価を学習指導の改善に生かすための工夫として、「授

業づくりの視点」が重要になると考えている。そのため、図中では、中央に「授業づくりの視点」を示し、青の吹き出しに②として関連する場所を示している。

#### （４）学習評価を児童生徒への支援に活用する方策

学習評価を児童生徒への支援に活用する方策では、知的障害教育で実践している自己評価や相互評価の工夫など、授業における児童生徒への教師の評価の返し方について整理するとともに、単元の指導計画作成において評価計画をどのように設定しどう活用されているのかについて整理することで、教師による学習評価を児童生徒への支援に活用する方策について検討していく。そのため、「授業における児童生徒への評価の返し方」、「自己評価や相互評価の工夫」を検討の視点とした。

授業における児童生徒への評価の返し方の工夫は、教育計画作成段階「P」の段階から始まっている。単元の授業計画を作成する段階では、単元の評価計画についても検討しておく必要があり、ここでの評価計画を基に「D」の段階で実践していくことになる。したがって、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」（図3-2-1）では、特に単元の評価計画に関連があるとし、図中では、紫の吹き出しに③として関連する場所を示している。その実践として、授業での活動そのものについては、「D」の部分にも関係していると考えられる。

#### （５）組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策

組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策では、学習指導に係るPDCAサイクルの中で、授業改善や指導計画の改善をどう進めているのか、学校全体で学習評価を組織的に実施し、その結果を活用するためにはどのような工夫があるのかについて整理する。さらに、教育課程を視野に入れた体系的な教育活動の見直しと改善に学習評価の取組がどのように結びつくのか整理することで、学習評価の取組から学校全体の教育活動の改善の方策について検討する。ここでは「学習評価の組織的な取組」、「教育課程の編成に活用する等の、体系的な学習評価の推進を促す方策」を検討の視点とした。

組織的・体系的な学習評価の推進は、教育計画作成段階（P）、指導計画・評価計画を踏まえた教育活動の実施段階（D）、学習状況の評価・授業の評価・指導の評価の段階（C）、授業改善・指導計画の改善・教育課程の改善段階（A）、の全てに関連があると考えられる。したがって、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」（図3-2-1）では、矢印の部分に、緑色の吹き出しに④として示した。

本研究では、研究によって整理し検討したい4つの柱それぞれの内容を整理し、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」（図3-2-1）との関係性を明らかにする。また、研究協力機関より収集した特色のある取組について、その背景や要因を分析して課題を明らかにし、研究によって整理し検討したい4つの柱との関連を整理することで、



組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策について検討していく。検討を進めるに当たっては、PDCAサイクルで示した要素とどう関係があるのか、PDCAサイクルの中でどのような役割があるのか、また、どのように繰り返されていけばいいのか等について、「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図」(図3-2-1)で示した要素を基に検討を進めている。そのため、次の第4章でまず研究協力機関の概要と学習評価の全体的な取組を示す。その後、第5章で、研究によって整理し検討したい4つの柱ごとに、研究協力機関の実践事例を踏まえて検討していく。

(松見和樹・尾崎祐三)

#### 参考文献

中央教育審議会(2010)「児童生徒の学習評価の在り方について」報告

文部科学省(2011)言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】～思考力・判断力・表現力の育成に向けて～

国立教育政策研究所(2012)評価規準の作成,評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校 国語)～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～

文科省(2013)育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(第2回)配付資料